平成29年度人権啓発講演会･ふれ愛講座（蓮池　薫さん）講演概要

新宮市では平成29年6月18日、蓬莱体育館において北朝鮮による拉致被害者で新潟産業大学経済学部准教授の蓮池　薫さんをお迎えし、「夢と絆」～北朝鮮での 24 年、そして今～ をテーマに講演会を開催しました。会場には超満員となる約 1000 人が訪れ、あらためて「拉致」を重大な問題として、蓮池さんの話に熱心に耳を傾けていました。

また、アンケートも実施し、約 55%の方からご協力をいただきました。その中で、「拉致に対してより一層理解が深まりました」「実際の体験による生の声は興味深く、とても身につまされた」「北に残されている人達を早期に返してほしい」などの感想が寄せられています。詳しくは、一覧表のアンケート欄をクリックしていただきますと、アンケート集計結果のＰＤＦファイルがご覧いただけます。

蓮池さんは、中央大学３年在学中の昭和53年に拉致され、北朝鮮で24年間の生活を余儀なくされました。帰国後は執筆や講演など幅広く活動しています。

蓮池さんは「拉致はまだ終わっていない」と語り、拉致が行われた経緯を解説。1970 年代、北朝鮮は秘密裏に工作員養成のために拉致を行ってきたといいます。昭和 62 年に発生した大韓航空機爆破事件で、工作員が日本人に日本語を教わったと供述し、国内のお拉致被害者の存在が初めて公にされました。平成 14 年には日本との関係改善を求める金正日総書記（当時）が拉致を認め、一部の拉致被害者が帰国しています。同年、24 年ぶりに蓮池さんが帰国してからさらに 15 年が経過。「拉致の本質的な問題として、私が一体何を失い、奪われたか。一言でいえば人生の夢を奪われ、家族を含めた絆を奪われた」と語りました。北朝鮮での生活には選択の自由、親としての自由もなかったといいます。

依然として北朝鮮に拉致されたままの人もいます。「本質的解決は帰ってきてもらうことだが、それは夢と絆を取り戻すため。そのための時間は限られています。被害者の親族は 90 歳を超えた人もいる」と説明し、拉致問題は非常に切羽詰ったものであることを訴えました。

また、蓮池さんは残されている拉致被害者の心理状態が、現在の拉致問題にとって重要だとし、「今残されている人たちは 15 年前、われわれが帰ったことを知っているはず」だと述べ、そこにある絶望の危険を主張しました。「彼らは北朝鮮からは死亡扱いを受けています。3 年前のストックホルム合意でも期待は高まったが成果はありませんでした。彼らは今も恐怖と絶望、ギリギリのところで待ち続けています。救出しなければどうなるかわからない状況だ」と話しました。

講演する蓮池 薫さん（蓬莱体育館）　平成 29 年 6 月 18 日（日）